特別企画

東日本大震災から1年

ログハウスの応急仮設住宅を訪ねて

東日本大震災による応急仮設住宅において、初めてログハウスが採用された。あれから1年。ログの仮設での住み心地や問題点などを知りたいと、3月23日、福島県の仮設住宅地を訪ねてきた。

取材・文／編集部　写真／いわた慎一郎

ログハウス仮設住宅分布図

二本松市と本宮市の仮設住宅地で話を聞く

2011年3月11日に起こった東日本大震災では、33万人もの人が生活の場を失った。各県で応急仮設住宅が急ピッチで建築されたが、福島県では、全国で初めてのログハウスの応急仮設住宅が採用された（受注／日本ログハウス協会東北支部）。1年前、本誌でもそのレポートを記事にしたが、あれから1年、ログハウスの仮設住宅のその後の様子を見に、3カ所の避難所を訪れた。

まずは、69戸のログハウスが建つ、こぢんまりとした二本松市大平農村広場。ログハウスに隣接した畑で作業をしていた山田さんご夫婦は、「最初にここに来たときは、知り合いがいなくて寂しかったけれど、いまは少しよくなったね。畑があるのはうれしいけれど、（放射能汚染で）食べられるのかどうか……」と話してくれた。住み心地を聞くと、「狭いよね。仕方ないけれど。でも他のプレハブなどと違って雨音が響かないようだよ」。犬を散歩させていた高井さんは、「すき間風があるので、冬はちょっと寒かった」という。

88歳でひとり暮らしをしている我妻さんは、「地震の次は津波で逃げて、そのあと（放射能で）また逃げろという。ここに来るまで7回移動したの」。我妻さんの住まいの中に入れていただくと、ひとり暮らしでそれほど多くない家財道具だが、クロゼットにすべてが収まらず、ちょっと窮屈そうだ。窓には、断熱効果を高めるための梱包材が張られていた。少しは効果があるという。

続いて全128戸という大きな仮設住宅地、本宮市恵向公園を訪れた。まるでひとつの集落のような規模だ。ここは、日本大学工学部浦部研究室も計画に参加し、町づくりの観点から、ログハウスに似合う楽園を随所に配置しているのが特徴だ。日本ログハウス協会が寄贈したポスト&ビームのグル

二本松市大平農村広場

1.家庭菜園用のスペースで、日向ぼっこしている住人の皆さん　2.片流れ屋根のログハウス群。茶色の塗装で落ち着きある佇まい　3.施工をした日本ログハウス協会 東北支部のスタッフが定期的にメンテナンスをしに来ているので、ログの状態も良好　4.10DKの単身用に住む我妻さん。こたつを置いたらもうスペースはいっぱい　5.愛犬を連れて避難中の高井さん。わとなしくて愛想のいいモックが、みんなの癒しになっているとか

ープホームもある。

住人の男性は、「ログハウスの仮設は、ずっと暮らせるようなつくりだよね。いいですよ」と、話してくれた。

改善された会津若松市の応急仮設住宅

最後に向かったのは、二次募集で建てられた、会津若松市松長団地。全200戸のうち、ログは40戸。けれども、ここはすべてが木造の仮設である。3タイプの木造仮設住宅が見られ、やはり、木の家がこれだけ建ち並んでいると圧巻であり、周辺全体を包むぬくもりも違う。すぐ隣には大きな総合病院があるので、お年寄りも安心だ。

二次募集で建てられたログは、一次募集での課題を踏まえて設計されている。新たに設けられた縁側にいて話をしてくれた栄倉さんは、「隣の音は聞こえないし、室内も暖かいよ」と、気に入ってくれているよう。けれども、室内を見せてくれた2DKに住む大西ご夫婦は、「壁が木だからさ、釘を直接打てて、棚が簡単につくれるのはいいんだけれどね。贅沢はいえないけれど、そんなに住み心地がいいとはいえないなあ」という。縁側がある西側に吹く風が強くあまり使えないのと、玄関側に、大きな身障者用のログハウス仮設住宅棟が建てられたので、圧迫感があるらしい。少しの立地の差で、住み心地が変わるのだ。すべての人に対応したつくりを考えるのは、難しいものである。

それでも、日本ログハウス協会東北支部の努力により、かなり住居環境が改善されているように感じるが、実はこの仮設住宅地、ログハウスも含め、空室が多い（取材当時）。人が少ないと感じたのは、平日の午後でしかも雨だったというだけではなかったようだ。「被災者のほとんどが福島県沿岸部に住んでいた方です。温暖な気候の土地に住んでいた方に、いきなり雪深い会津地方で暮らせといっても躊躇するはず。とくにお年寄りは」と、この仮設住宅を施工したログメーカーのスタッフ。自治体による仮設用地の選定の問題が浮き彫りになっていた。

震災時における仮設住宅は「ログが当たり前」になる

3カ所のログハウスの仮設住宅をまわり住み心地を伺ってきたが、最も多かったのが「狭い」「収納が少ない」という広さや設備に関係したものだった。ログハウス自体への不満は少なかったが、なかには「山小屋みたいで……」という意見もあった。ログハウスという建物、その特異性が一般的にまだ知られていないからだろう。また、予算や敷地の問題からも、被災者個々の要望にすべてこたえるのは無理かもしれない。しかし、その努力はしていくべきであり、実際今回施工に携わった多くの方は、よりよいログハウスの仮設住宅を建てるために尽力している。

実際にログハウスは快適な建物であり、地元の材を使え、工期も短く、何よりもその材は再利用できる。別荘としての山小屋から、その性能が認められ住宅として進化してきたログハウス。今後、災害時の応急仮設住宅としても一般的な建物になってくれることを願ってやまない。

本宮市恵向公園

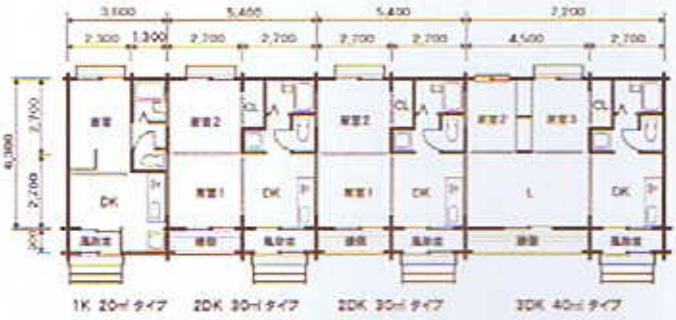
6.本宮市恵向公園の仮設住宅地にも、家庭菜園の場がありクラインガルテンのようにしている。緑や土があるだけで、住人の心も和む　7.全128戸とたくさんのログハウスが並ぶ

会津若松市松長団地

8.会津若松市松長団地の仮設住宅地のログハウスの壁は無塗装。まだ色が白いので雨戸が明るく感じる　9.バリアフリー設計の身障者用の仮設住宅。残念ながら入居者はだれもいなかった　10.インナーデッキのある仕様

ログハウスの応急仮設住宅 二次募集でも改善点

プレハブ建築協会のプランをログハウス用に置き換えるという制約のあった一次募集のログ仮設住宅は、プランの複雑さ、セトリング対策による工期の長さという課題があったが、二次募集では建築家・難波和彦氏からのアドバイスを受け、間仕切りを減らし、大らかな空間を確保したログハウスらしいプランになった。具体的には風除室をログ壁に取り込み、それにより縁側が設けられた。また、積雪に対応する無落雪を基本とした構造、表しだった配管・配線の集約などがある。工期も1週間ほど短縮された。さらに、間取りと広さのバリエーションも増えた。



二次募集で建てられたEタイプの平面図

※参考文献／『木造仮設住宅群　3.11からはじまったある建築の記録』（ポット出版）

特別寄稿

仮設住宅から復興住宅へ 災害時におけるログハウスの可能性

ログハウスの仮設住宅建築において中心的な役割を担ったはりゅうウッドスタジオ。同社の滑田氏に、今後の課題や動き、将来的な可能性について語っていただいた。

滑田崇志　はりゅうウッドスタジオ
イラスト／いわた俊二郎

2011年の東日本大震災後に生まれたログハウス仮設住宅については、今回のみの特殊事例というわけではなく、今後の減災時に全国で建設される可能性のあるものです。建設物資の不足する震災時では、利用後の再利用や快適性という点からも、ログハウス仮設住宅は、他の構法と比べて大きなアドバンテージがあります。

平常時は、ログハウスメーカーとして競合相手となる場合においても、仮設住宅建設時においては、地域のメーカーがそれぞれの特色を生かして協力し、伐採・製材・加工・建設・設計を一体のネットワークとして取り組む必要があります。また日本ログハウス協会内でも、仮設住宅に対する準備や、木材の備蓄と大型ログハウス建築とを関連づけた体制の提案等の準備が進んでいます。

ボランタリズムの必要性

災害時の活動において、市民の側からの自発的な活動である「ボランタリズム」という精神が必要です。自治体も被災時にはさまざまな対応に追われ、指示についても十分に行われる状況ではなくなります。そのため、建設に携わる側からも、よりよい住環境やまちづくりといった観点から仮設住宅の建設、災害復興にかかわらなければなりません。ログハウス仮設住宅が評価されているのは、「ボランタリズム」という精神から計画、建設を行い、快適性のある居住空間、クッインガルデンのような仮設住宅地を生んだからでもあります。またほかの多くの木造仮設住宅においてもさまざまな工夫が凝らされています。

復興を進めるために、市民の側から提案することは必要なことですが、一方で施工性・採算性のない建設も経済性がないためによくありません。先に述べた地域ネットワーク内で意見を出し合い、施工性・採算性とのバランスをもとった建設活動をする必要があります。

※「ボランタリズム」は、時代の危機や苦境、あるいは未解決な社会的な要請に呼応したり、さらには自己表現等の創造的教育となって、市民（住民）の側から社会の後に働きかける精神であり現実である。（岡本哲一「二十一世紀福祉社会とボランタリズム」より）

ログハウス復興住宅に向けて

仮設期から復興期に向けて、仮設住宅についてはおもに2年くらいが使用期間であると決められています（阪神大震災の事例を見ると実際には5年住んでいた方もおり、長期化することも多いです）。その後は新しく建てた住宅に住むようになるのですが、大量に住宅が必要なことから、大量需要や被災者の方が取得しやすい低価格化に対応するために部材・プラン等を規格化するなどした災害復興住宅の準備が進められています。大手ハウスメーカーもこうした復興住宅向けの商品を相次いで出し、大量需要への対応に向けて準備を進めています。

一方で地元工務店などのネットワークにより地元の材料を使った地元工務店による地域型復興住宅の準備も、自治体や建築士事務所協会などを中心に準備が進んでいます。地元工務店がどこまでハウスメーカーに対し、供給力において対抗できるのかということが大きなポイントにもなっています。年10～20棟やっていた工務店が、50棟や100棟の供給をするようになるには、生産者ネットワークの構築が不可欠です。

またそうした復興住宅がまとまってできるとまち（都市）にもなります。その際には、住宅単体だけでなくまちづくりの観点から住み手とともに住宅地を計画する必要も出てくるのではないでしょうか。地域型復興住宅の中でログハウス建築が普及していくのかということは、ひとつの課題です。

ログハウス建築は、魅力的ながらも、人々のイメージの中でスタンダードではありません。そのため復興住宅として被災者の方から注文をいただけるかどうかはわかりません。仮設住宅の建設によって、ログハウスの魅力についても人々に伝わった部分もありますが、先ほどのボランタリズムの精神の中で、本当に被災者の方から必要とされる復興住宅像に、ログハウスがどれだけ寄り添えるかということを考えなければなりません。

ログ復興住宅の具体的な動き

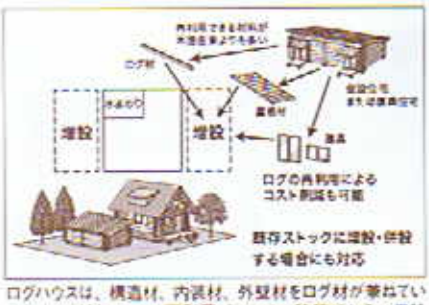
私たちは、「福島復興再生協会」を立ち上げ、福島県の「ふくしまの家」復興住宅供給システムプロポーザルにおいて応募58団体の中から実施設計を行う8団体に選ばれました。ログハウスを含めた3タイプの住宅を提案しています。そこではおもに7つのテーマもありますが、とくに解体移築可能であること、仮設住宅の材料も再利用できること、まちづくりの観点からの提案を行うこと、ロハスの思想を盛り込むことなどを、福島県における復興住宅のテーマとして盛り込みました。

とくに福島県では、原発による事故のため警戒区域内にすぐには戻れないケースも多く、周辺の都市であるいわき市や南相馬市に「仮の町」をつくる構想もあります。そのため、復興住宅建設後も数年後に住宅を移転することが考えられます。だからこそ、解体移築可能、居住性といったログハウスの特色も復興住宅に生かしたいと考えています。

復興住宅の開発については始まったばかりです。本年度は、ログハウス仮設住宅を復興住宅に転用するための研究（日本ログハウス協会内による）や、日本大学の清水研究室と協力し仮設住宅に住む被災者の方を中心としたワークショップなどを行いながら、復興住宅のあり方、まちづくりのあり方について検討し、ひとつの提案としてまとめたいと考えています。

なめだ・たかし●日本ログハウス協会東北支部によるログハウスの応急仮設住宅建築において、設計・施工の中心的役割を担った株はりゅうウッドスタジオ 代表取締役。昨年末に募集された「ふくしまの家 復興住宅供給システムプロポーザル」において、ログハウスの仮設住宅をもとにした復興プランが採用される（団体名「福島復興再生協会」）。

仮設・復興住宅の解体移築の可能性



ログハウスは、構造材、内装材、外壁材をログ材が兼ねているために部材について再利用がしやすい建築である。仮設住宅の転用の際も、一部の増築により復興住宅として利用することができる。

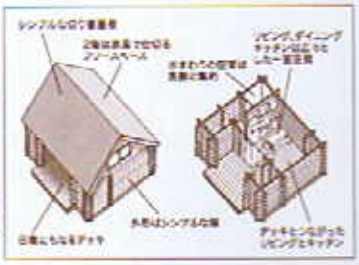
ログハウスの仮設住宅地。役目を果たしたあと、解体や移築をし、復興住宅として再生できる

ログハウス仮設住宅を復興住宅に転用した場合の検討模型

仮設住宅を復興住宅に転用する際、仮設住宅内で変換する方法が、住民のつながりも維持することができコストなども最も抑えられる形である。おもに基礎や屋根の付け替えによって対応できるようにしている。

福島復興再生住宅協会の提供する住宅のバリエーションの例

「ログ・コンパクトハウス」
最小限の大きさ（21坪）の基準となるログハウス復興住宅。閉塞的な1Fのリビングダイニング、2Fについても家具などで仕切るなど、自由に使うことができ、さらに自力建設が可能な価格帯やプランについて検討を行った。



「ログ・箱の家」
箱の家シリーズをつくられている能登和彦＋界工作舎設計の復興住宅。ログ材を積み重ねではなく縦に使い、より解体移築が容易となるパネル化に対応している。基本プランは夫婦ふたりが主体で、天井高さも4mある気持ちのよい空間。同種の構法については釜石市における「KAMAISHiの箱」でも建設されている。

「海辺のログハウスでのんびりと暮らしたい」その夢を6年前に実現させた、宮城県山元町の吉野さんご家族。しかし2011年3月11日、大津波が一瞬にして吉野さんたちの「普通の暮らし」を奪った。ログハウスのブログ仲間たちに支えられ、「もう一度ログに住みたい」と願う吉野さんご家族を追う。

特別企画 東日本大震災から1年

海辺のログハウス 再生の軌跡

第1回

写真／吉野さん、ブログ仲間の皆さん、本誌編集部

幸い試練に前向きに立ち向かっている吉野さんご家族。愛犬のハチも車上生活を強いられた

間取りの家のほとんどが流され、海まで見えるようになった吉野邸

4月2日に撮影されたログハウス。家の前はクルマが3台も押し流されているほどすさまじい状態。山元町は815人もの人を亡くした

「夢丸」と吉野明子さんとの出会いは、2011年2月。『夢丸』2011年5月号の「ログオーナーさんの座談会」だった。ログハウスのブロガーとして顔の広い東京の掛川さんが、ブログを通して知り合いになった仲間を集めてくれて実現した企画だ。その場所に、明子さんは長女の帆南（ほなみ）ちゃんを連れて、はるばる山元町から参加してくれた。夢だった海辺のログハウスでの暮らしをとても大切にしているのがよくわかる話が印象的だった。この座談会の編集作業をしていた3月11日、東日本大震災が発生。続いて津波が東日本の沿岸部を襲った。「明子さんは大丈夫だろうか？」。翌日掛川さんに問い合わせると、やはり安否は不明とのことだった。

掛川さんは地震直後、ブログで仲間の安否を確認するスレッドを立てた。「電話は通じないけれど、ネットは大丈夫だったので」と掛川さん。全国のブログ仲間が次々と無事を知らせてくれたり、仲間を心配するコメントを残してくれたりした。「そんななか、吉野さんの安否だけがずっと確認できず、みんなで心配していました」

震災後4日も経った15日、仙台市の佐藤さんがブログで、吉野さんの無事を報告した。「みんなはっとして涙が出てきたっていっていました」（掛川さん）

実際に吉野さんの無事を確認したのは、仙台市の鹿目さんだ。鹿目さんのログハウスも地震で増築部分が崩れ、大きな被害を被った。地震のショック、停電、物資不足……先行きが見えず普通なら人のことなどかまっていられなくても当然の状況にいたはずだ。それなのに、震災から3日目に吉野さんを捜しに行ったという。

「うちもいつ崩れるかわからない状況でしたけれど、電気もガスも使えない。もちろん仕事もできない。親戚が石巻にいるけれど、向こうは現地に足を踏み入れることもできないという。だったら、とにかくいま自分ができることをしようと、吉野さんがいる山元町に行ってみることにしたんです。避難所にいるのなら、うちのほうがまだまし。よかったらわが家に来てもらおうと思いました。5カ所目でやっと吉野さんたちを見つけました」と鹿目さん。その話を聞いた佐藤さんが、吉野さんご家族の無事をブログにアップしたのだ。

「うちのログは中の物が落ちてめちゃくちゃになりましたが、幸いログ自体はまったく問題はありませんでした。近所の鹿目さんとは直接会え、一緒に吉野さんのことを心配していました」と、佐藤さん。佐藤さんも鹿目さんが行った翌日に吉野さんを訪ねたが、吉野さんたちはすでに社宅に移動していてすれ違いになってしまった。

被災前のログハウス。庭をつくり、経験もあったがすべて流された

新築時の吉野邸。すぐそばに海があり、理想の暮らしを実現していたが、家の前面に津波が直撃。けれども、ログ壁は津波に負けなかった

絶望的な避難所生活中に、ブログ仲間が来てくれた！

さて地震発生時、明子さんはログハウスの自宅に、長男の泰章（たいしょう）くんと一緒にいた。奇しくも関西出身で「阪神淡路大震

災」を経験していた明子さんは、とっさに泰章くんを抱え外に飛び出し、地震が収まるのを待っていたという。「怖かったです。外に出てきた近所の人たちと、大丈夫だった？なんて声をかけ合っていたら、ある人が『娘の携帯見たら、津波警報が出てるよ』というんです。みんなで手分けして足のない近所の方たちをクルマに乗せて避難することになりました。そのあと、帆南を学校に迎えに行ったのですが、見つからない！　パニックになりました」と明子さん。ようやく娘さんを見つけて、高台にある町役場に向かった。「もうなにがなんだか。よく知っている道なのに、遠回りしたり。そのとき同乗していた近所のおじさんに、あのときあんた、すごく震えてたよといわれました」

仙台にある職場で仕事をしていたご主人の政一さんは、「地震直後、やっとつながった電話で妻の第一声が、『ばなちゃんがいない！』

津波が2階の床面ぎりぎりまで来たことがよくわかる。2階は床が泥水で少し汚れたが、大きな被害はなかった

という絶叫。すぐ自宅に向かいましたが、大渋滞でまったく前に進まず……。また運よく携帯がつながり、娘が見つかったこと、高台の町役場に向かっていることを確認しました。安心して一度職場に戻ったんです。津波警報で予想されている津波の高さは6mでした。不安でしたが、海岸に堤防もあるし、悪くて床下浸水くらいだろうと高をくくっていたら……」。職場のテレビを見ると、そこには信じられない光景が映し出されていた。真っ黒な津波が仙台空港をのみ込んでいたのだ。「空港までということは、間違いなくわが家にも来ている……」

上司にもすぐに帰ったほうがいいといわれ、やっとの思いで避難所で家族と合流できた政一さん。「家族がバラバラにならなくて本当によかった」

避難所は、足の踏み場もなく、子どもたちをだれかに踏まれたり蹴られたりしないように、抱えていなければならないほどだったという。食事も具のほとんどない汁物が2時間も並んでやっと手に入るという状況で5日間過ごした。周囲から聞こえてくる話は、身内や知り合いが亡くなったことや間一髪で津波から逃げたということばかり。「もうわが家も流されて基礎だけが残っているんだろうな」と思っていたとき、早朝に自宅を確認しに行ったという近所の人から、「残っていたよ」と聞いた。少しだが希望がもてたという吉野さんご夫婦だった。

5日目、避難所にいたときに「吉野さんいますか～？」という声が聞こえ、振り向くと、そこに鹿目さんご夫婦がいた。「私も妻もその場で泣き崩れていました。鹿目さんだって、被害に遭ってたいへんなときだったのに。差し入れのおにぎりがおいしかったなあ」（政一さん）。その日の夜、ようやく政一さんの職場と連絡がとれ、あいた社宅に入れることになった。6日目の朝に、避難所を離れることができた。

「よくぞ残っていてくれた……。でも、もう住めないかもしれない」

1階内部は以前の面影もなく、冷蔵庫、薪ストーブなども別の場所に流されていた。泥もすごい

折れた壁の外側。これを見て、もう住めないと思うのも仕方がない

津波が直撃した東面のログ壁が、くの字に折れてしまった

残っていた自宅の姿にただ号泣するばかり

「携帯が通じるようになったと聞き、手助けできることはないかと明子さんに電話をしました」とは、千葉県の早崎さん。「なにか欲しいものある？って聞いても、遠慮するんです。そんなわけないのに。あ、そんなレベルじゃないんだって、そういう聞き方じゃダメなんだって気がついて、じゃあいまもっている物を教えてと聞いたら、おたまひとつとえっと……って。つまり、なんにももっていなかったんです」と、すぐに当面必要な日用品を送ったという。「私だけじゃないと思います。みんな吉野さんを心配していたから」

また、掛川さんがブログ仲間に呼びかけたことで、吉野さんへの義援金も集まった。

吉野さんご家族が全員無事ということがわかり、ほっとした仲間が、次に気がかりだったのは、ログハウスだ。

避難所から社宅に移ることなった日、吉野さんご家族はようやくログハウスを見に行った。「瓦礫だらけでどこが道路だか、どこにいるのかわからない状況で、三角

吉野邸の周囲。山元町の家屋への被害は、全壊（流出含む）2217棟、大規模半壊534棟だという

驚くことに、窓が割れていたのは北側の浴室の窓のみ。そのほかはそのまま使用できそうだ

屋根のわが家を見つけたとき、妻と号泣しました。『よくがんばってくれた……』と、自分たちのうちが愛おしくてたまりませんでした」と政一さん。「でも瓦礫を乗り越えて中に入ると、中はめちゃくちゃ。壁はくの字に曲がっているし、冷蔵庫は棚の上に載っているし、薪ストーブはひっくり返っていました」

「泣いていたら、近所の人に『今日初めて見たの？　それじゃあシロックだよね』って声をかけられて。つい先日にその方と一緒に素敵な家建てて、家族仲良しでいいねえ」と話したばかりだったんです」と明子さん。

「もうこの家には住めないかもしれない……」と、おふたりは絶望ってまさにこういう状況のことなんだ、と思ったという。

集まったブログ仲間で、大きな設備やピアノを外に出し、泥をかき出した。写真左奥、キッチンカウンターの上に載っているのは、冷蔵庫

とりあえず、津波に耐えたログハウスをみんなでできるかぎりきれいに。これからのことは後から考える

お気に入りのダッチウエストの薪ストーブが再び使用できるか、みんなで検査中。鎮が取れるのか……

「マシンカットログだから」再び住める可能性

佐藤さんは、吉野さんのいる避難所に行ったときに吉野邸を撮影していた。それを見た早崎さんが、「みんなで吉野さんの家をきれいにしに行こう！」と呼びかけると、ブログ仲間が何人も呼応した。

その中に、宮城県のログメーカー、ログ・トラストの金澤さんがいた。「メーカーという立場でではなく、いちログファンとして皆さんと接しています。吉野さんともお会いしたことがあるし、友人として何かしたかったんです」と金澤さん。みんなで現地に行ったときに何ができるのか、ログの状態はどうなのか、一度プロの目で下見をしてもらえないかと仲間から依頼を受け、金澤さんは、3月27日に吉野邸を見に行った。

「周囲はひどい状況。でも吉野邸はマシンカットということが幸いしていました。丈夫な丸太組み構法ということに加え、マシンカットは壁に断熱材が入っていません。在来構法の壁なら海水で断熱材がダメになっているので、建て直しが必要になりますから。曲がった壁も直せると思いました。プロの目から90％以上は、再び住むようにできるという確信を得ました」

ログハウスをきれいに！吉野邸復興の第一歩

吉野さんにとっても仲間にとっても希望の光が見え、4月9日に「ログをきれいにする」ことが決まった。しかし、ガソリンをなんとか用意し、いざ出発するという前日の夜、またもや東日本沖に震度6という余震が襲った。海辺の現地はまだ危険ということで、泣く泣く中止にした。

仕切り直して4月23日、日程の変更により参加できなくなった仲間がいたのは残念だったが、8人が集まり瓦礫や薪ストーブ、ピアノ、冷蔵庫などを運び出し、泥出しをした。

「ブログ仲間ってそこまでするの？」と思う人もいるかもしれない。けれども、掛川さんのブログから広がっていった「ログ好き」のメンバーは、お互いの家を訪ね合ったり、一緒にログハウス見学に行ったり、薪を収集したり、インターネットのつながりを超えたつきあいを自然とするようになったという。遠かったり、仕事の関係などで実際に会えない仲間もいるが、「ログハウス」をキーワードにつながった仲間は、ライフスタイルや価値観が似ているのだろう。

「大人になると友達ができにくいですよね。けれど、ブログの仲間たちとはなぜかすぐに友達になれるんです」とは、掛川さんと早崎さんの言葉だ。「友達の吉野さんご家族が、早く普通の生活に戻れるように、応援したかった」

本当にこのログハウスに、この土地に住めるのか？

「いつも仲間が励ましてくれました。本当に心の温かい人たちです。ブログをしていてよかった」と吉野さんご夫婦。丸1日かけて、吉野邸は驚くほどすっきりと片づいた。料理上手な佐藤さんによる炊き出しもあり、思い出に残る楽しいひとときとなった。

しかし、家が本当に元どおりになるのかという以前に、津波がまた来るのではないか、この土地に人が戻って来られるのだろうか、放射能汚染は大丈夫か……。先行きはまったく見えない現実。「実はそのときはまだ不安で、この家に住むことに前向きにはなれませんでした」と明子さん。この後、さまざまな問題にぶつかる吉野さんご家族は、紆余曲折ありながら、リフォームすることを決意する。

〈続〉

2011年4月23日に吉野邸に集まった仲間たち。右から東京都の渡辺さん、東京都の鈴木さん、金澤さん、佐藤さん、政一さんと軌南ちゃん、明子さん、渡辺さんの息子さんの一生くん、青森県の鈴江さんご夫婦（撮影は早崎さん）

「吉野さんのログハウスを片づけよう！」仲間が山元町に集まる